

価値概念について（二）

—その内容と意義—

まえがき

一、価値の通俗的意味

二、イギリス古典学派の価値概念

(1) 経済法則のとらえ方

(2) 商品価値の解釈

(3) 古典学派価値概念の特徴と問題点

(イ) その特徴

(ロ) その問題点

三、マルクスによる科学的価値概念の確立

(1) 科学的経済学の基本的視点

(2) 社会存続の根本条件としての人間の労働

(3) 労働の二面性の把握……………

(4) 商品の法則——労働の物化と自立化……………

(5) 価値概念の骨格

（以上、本号所載）

（以下、次号掲載予定）

価値概念について（二）

山 本 二 三 丸

(f) 価値の実体と価値

(g) 価値規定

(h) 価値の人間支配

(6) 価値の結晶としての貨幣の全能

(7) 価格形態の特質

(8) 労働力の商品化と剰余価値

(9) 資本の全一的支配と人間社会の変質

(10) 擬制的「価値」による強力的収奪

四、価値概念の欠如した「経済理論」の反科学性と階級性

五、資本主義社会における価値生産の客観的意義

六、人間および人間社会にとっての人間の労働の一般的絶対的意義

七、社会主義社会における価値生産の全面的廃棄

簡単な要約

あとがき

まえがき

経済理論について書かれたマルクスの著作はもちろんのことですが、マルクス以外の人々によって書かれたマルクス経済学にかんする多くの著書や論文に目を通したところのある人でしたら、必ずといってよいほどその中に価値という言葉がよく出てきているということに気づかない者はないと思います。価値という言葉は、それほど頻繁につかわれているものですし、また、その言葉そのものも、それほどむずかしいものではないように思われます。私自身も、

経済学を学びはじめたからかなり長いあいだ、そのように思い、簡単なものと考えていました。しかし、価値理論についていろいろ考えたり、またそれについて論文らしいものを書いたりしているうちに、それはけっして簡単なものではなく、よほどしっかりした心構えをもってその奥深い内容をとらえてゆくようにしなければならぬのだというところが、よくわかってきたように思います。私の専攻分野——というほどのものでもありませんが、一応建前として申しあげれば——は、マルクス経済学の基礎理論というところにありますので、もともと価値という言葉の意味はここ四十年ものあいだ考えてき、またそれについてたくさんの方の著作らしきものもなんとかつくりあげてきたのですが、しかし、浅学非才とはこのことを言ったものでしょうか、価値という言葉についてそのひとつの核心的意味がやっとならぬようになったのは、ごく最近のことです。

いまから六年ほど前に、私は、マルクスの名著『資本論』全三巻について、ここではマルクスのうちたてた価値理論がどのように正確に展開されているであろうかということの確認の問題を自分に課して、これに答えるようにつたない研究をつづけ、その成果らしきものを、つぎのような、六つの論稿で発表してきたものです。

五五年六月 『価値理論の展開(一)』(本誌、第三四卷一号所載)

五五年九月 『価値理論の展開(二)』(本誌、第三四卷二号所載)

五六年三月 『個別的価値と社会的価値』(本誌、第三四卷四号所載)

五六年九月 『費用価格と利潤』(本誌、第三五卷二号所載)

五七年三月 『平均利潤と生産価格』(本誌、第三五卷四号所載)

六〇年七月 『市場価値と「虚偽の社会的価値」』(本誌、第三九卷一号所載)

ここに並べられたような順序で価値理論の展開を追究してゆくなかで、それまで私が考えていたような価値という言葉の解釈ではとうてい解決することができないというところにぶつかったのは、右のうちの最後の論文で市場価値とはどのようなものかということをはっきりさせなければならぬという問題に直面したときです。そのときはじめて——甚だ恥ずかしい次第ですが——価値という言葉がどんなに奥深い意味をもったものであるかということ、身にしみて痛感させられたことです。どのようにしてそのような問題が生じてきたものか、そして、それを一応自分の納得のいく形でどのように解決するようになったかという、その間の経緯については、右に挙げた最後の論文のなかで、かなりに詳しく説明してありますので、参照していただければ、幸いです。

以上申しあげたような苦い^{にが}経験を通じて、私は、価値という言葉の基本的な意味内容をもう一度よく点検し吟味してみることが必要であると考えたものです。価値という言葉を科学としての理論体系の中で正しく位置づけてとらえるときには、たとえ術学的との評をあたえられることがあるとしても、やはり、明確に、価値概念、という表現をとらなければならないと考えられますので、これからは、価値という言葉の代わりに、価値概念という文字をつかうことにしたいと思いますが、この拙論は、その価値概念の基本的な内容を、これまでの私の行なってきた価値理論にかんする拙い論究のとぼしい成果ともつきあわすことによって、整理した形で簡潔にまとめておくことをめざして、そのためにここに貴重な紙幅をおかりすることにしたものです。

右の課題を考究するにあたっての私の立場と考え方、そしてどういいう問題をどういいう順序でとりあげていくかということは、はじめにかかげた目次でおわかりいただけると思います。価値概念の基本的内容についての私の拙い説明のなかで私がとくに力点をおいて明らかにしようとしていることがどのようなことであるかということも、おそらく

じきにとらえていただけると考えています。それについて、一言だけ付け加えさせていただきますと、この価値概念の内容についての拙い論稿は、これまでの価値理論についてのいわば体系的な論究の一環としてそのしめくりをなしているものであるばかりでなく、むしろ、私が多年にわたってその見取図の作成に叶わぬ努力をつづけてきています「人間経済学」といったものを構築するための大切な一つの素材につくりあげたいという、望みを託しているものでもあるのです。「経済学は、商品、貨幣、資本や、利潤、利子、地代といった物が本当の対象ではなく、人間を主体にしたもの、真にその名に値する人間と人間社会とをつくりあげるための科学でなければならぬ」——このような、大言壮語にも聞える主張の成否について、読者諸君が、この拙論をお読みになって、いささかでも考えをめぐらしていただくことができれば、というのが、私のひそかな願いとするところでもあります。

一 価値の通俗的意味

価値 (value, valeur, Wert) という言葉は、日常の会話でもよく使われるもので、その意味のわからないひとは、おそらく一人もいないでしょう。簡単にいえば、それはねうちということ。たとえば、ひとは誰でも、よくこう言います。——「この道具はねうちがある」、または、「中曽根という男は利用する価値がある」と。念のため、辞典を引いてみますと、『国語辞典』(岩波書店)には、「あるもの・ことがどれくらい役に立つか、またどれくらい大切なという程度。またはその大切さ。ねうち」とあります。また同じ書店発行の『広辞苑』では、「①物事の大切な程度。ねうち。効用。②「哲」よいといわれる性質。……(中略)……③「経」何らかの要求を満たすための効用の見地から物に対して認められる意義。生活における直接的効用という点からの使用価値と、他財との相対的關係におい

て持つ交換価値とに分ける。」と記されています。この二つのうち、後者の説明のなかの②と③は、そこに示されているように、日常の用語としての意味ではなくて、それぞれ哲学用語および経済学用語としての意味が説かれていすので、この②と③とを一応度外視しますと、価値という、日常使われる言葉の意味は、ねうちということであり、効用ということだということは、動かしえないところといえます。

ただひとつ、ここで私たちがとくに留意しておかなければならないのは、右のねうちとか効用とかいうものは、ただそれだけがひとりで存在しているというものではないということ、そこには必ず人間という主体になるものがある、その主体にとってのねうちであり、効用である、ということと、たとえばさきの例で言いますと、「この道具はねうちがある」というときには、そこにはその道具をつかう人間がいて、その人間にとってその道具が役に立つ、ねうちがあるということを指して言ったものです。また、「中曾根某という男は利用する価値がある」というのは、たとえばRなにかしという人物がいて、その人物が中曾根某をうまくあやつって、自分の望みどおりの目的をうまく達することができるといふことで、他人はいざ知らず、Rなにかしという主体にとつたいへん役に立つ男だということをよくあらわしたものです。

ですから、その価値をもっている物または人間というのは、それ自身が主体として独自に存在していることをあらわすものでもありませんし、また、それが独自の主体としてあるかぎりでは、それが価値をもっている、などという命題は、まったく成り立たないものだ、ということがよくわかります。そこに、その物または人物のほかに、これにたいして主人公としてふるまえる人間が、つまり本当の意味での主体としての人間がいて、その人間がその物なり人間なりを自分の考えどおりに自由勝手につかうことができ、しかもその主体である人間にとって、なにがしかの効用

をもつことができ、多少とも役に立つことができるというときに、そのときにはじめて、その物なり人間なりが、当の主体である人間にとつて、価値がある、と言われるのです。

右のように、日常使われている価値という言葉について、そこに必ず人間主体があり、その人間主体にとっての役立ち、ねうちにはかならないということをしつかりと把握しておくことは、科学的な経済理論を正確に理解するうえで、決定的に重要なことです。というのは、このように、人間主体にとっての役立ち、ねうちという通俗的な意味においてしが価値という言葉を考えることができないかぎり、科学的な経済理論がどういふものであるかという肝心のことについては、その片鱗すらとらえることができないからです。ここで科学的な経済理論と申しましたのは、客観的な事物とそれらを支配している客観的な経済法則とを、とらわれることのない、曇りない目で正しく把握することができるものを指して言っています。右の肝心の点を見失うときには、どうしてもとらわれた、非科学的な経済理論の方向に引き入れられてしまうという、自然の成り行きについては、つぎの「二」のなかで説明されていることが、そのひとつの歴史的事例になっているといえます。

二 イギリス古典学派の価値概念

アダム・スミスとデイヴィッド・リカードウをそのすぐれた代表的学者とするイギリス古典学派の経済理論が、イギリス資本主義の興隆期に生まれた最良のブルジョア経済理論であつて、マルクスによつてうちたてられた科学的な経済学が、そのすぐれた成果をうけつぎ、これを根本的に揚棄することによつてできあがつたものだということは、ひろく知られているところです。この古典学派において、価値という言葉がどのように解されていたかということ

考えるにあたっては、それに先きだつて、この学派の人々が、彼らの住んでいた資本主義社会についてどのようなことを考へていたか、また、その社会ではたらいっていると彼らが考へていた経済法則とはどのようなものであったかというのと、一言でいえば、その経済理論がよつて立っているところの社会的観点とそれに結びついている法則観というものを簡単にみておくことが、きわめて適切ではないか、と私は考へるものです。

(1) 経済法則のとりえ方

さきにふれたように、古典学派の学者たちが活躍した時期は、イギリスで資本主義的生産が勃興してこれからますます隆盛に向うと見られていたときです。当時は人間社会の歴史についての知識も十分ではなく、彼らが知っている歴史的社会といへば、一般的には、後れた封建制社会以上には出るものではありませんでした。封建的束縛をうちやぶつて、「自由、平等、ペンサム」の旗印のもとに資本主義的生産は拡大の一途を辿り、「国富」もめざましい膨張をとげつつあったこの社会が、それ以前の「未開」の、いわば「無知、蒙昧」の社会に比べて、この上なく合理的な、永遠の繁栄を約束された「文明社会」であるとの信念が、彼らすべての頭の中に揺ぎないものとなつていたのも、まことに無理からぬことといえましょう。

したがつて、彼らの学問的関心は、たとえば、アダム・スミスの名著『諸国民の富』というその表題そのものによく示されているように、イギリス資本主義社会の「富」をどのようにして増大させることができるか、その増大する「富」を、この社会を構成している三大階級、つまり、資本家階級、土地所有者階級、そして賃銀労働者階級の間どのように分配すべきか、ということの上にならなければならないことになつたわけです。いいかえれば、「国民の富」の生産および分配についてのもっとも合理的と考へられる準則、彼らの考へにしたがえば、そのための「経済法則」を見

出して、この準則にしたがって一国の経済政策をうちだすようにさせること、——これがその経済理論の最大の眼目であり、またその中心的課題でもあった、ということができます。デイヴィッド・リカードウの著者といわれる『経済学および課税の原理』という題名そのものも、このことをよく示しているように思われます。

右のリカードウの著者の題名にある「原理」という言葉によっても、つぎのようなことがよくわかります。つまり、彼らが最大の関心を寄せてその探求に努めたのは、与えられた歴史的社会で客観的に、いわば人間が意識するとならないとかかわりなく、鉄の必然性をもって貫徹している経済法則そのものではなく、むしろ、人間が頭の中で考へだした原則であり、いいかえれば、人間がそれに則って行動しなければならぬとされるひとつの規範にほかならないものだ、ということです。

当時は、さきに述べたようにイギリス資本主義の興隆期にあたっていて、「国民の富」のめざましい増進に目を奪われて、たとえば、エンゲルスの名著『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年第一版）の中で克明に描写されているような、賃銀労働者階級のこの上なく悲惨な状態に関心をよせることのできない、恵まれた学者先生たちにとっては、右のようなイギリス資本主義の永遠の繁栄を保証する経済学の「原理」にひたすら執着せざるをえなかったというのも、またしごく当然のことであつたと考えられます。ですから、その「原理」はすべて現状を肯定し、現実の在り方をそのまま「合理化」したものとならざるをえないのは、理の当然といえましょう。このことは、まず商品について、つぎのような考え方を生みだします。

この「文明社会」では、生活手段にしてもまた生産手段にしても、一部の自家用生産物を除いて、そのほとんど全部が商品として交換されています。つまり、労働生産物は、いずれも商品となっているのですから、逆に「商品とは

なにか？」といえば、「それは労働生産物である」という答えがかえってくることになります。では、それ以前の「未開社会」では労働生産物は商品ではなかったのに、なぜ、「文明社会」では、それがほとんどひとつのこらず商品になるかといえ、それは、古い社会では「分業」がなく、すべて自給自足であったが、「文明社会」では、人間は知恵を働かしてひろく「分業」を採用しているからである、と答えます。各自が分業のもとで、必要生産物の全部をつくりだすことはできず、必然的に自分の労働生産物を他人の労働生産物と交換しなければならぬことになる、というわけです。この社会では、必要生産物はすべて人間の労働によってつくりだされたもの、つまり労働生産物であって、その労働生産物はほとんどみな商品となりますが、しかし、この「文明社会」では人智がひじょうに発達して大いに「分業」をおしすすめ、それによって労働の生産力はますます増進をとげ、これによって「国民の富」はいやが上にも増大をきたすことになる、——と、こういうわけです。

右のように、「分業」によってすべての労働生産物は商品とならなければならないという考え方を基本にすえて、商品の価値というものを分析すると、おおよそ、つぎのような「解答」がひとりりで導き出されてきます。この場合には、さきに「一」で述べた価値についての通俗的な考え方が、決定的な意味をもってくるものだということに注意することが肝要です。つまり、人間主体を中心に据えて、その人間主体にとってのねうち、役立ち、効用という考え方が基本なのです。

(2) 商品価値の解釈

そこで、商品についてみますと、第一に、それは、その自然的性質——これは、理論的には、自然的形態といえます——を利用してそれを使用し消費することによって人間のなんらかの欲求をみたすことができるという意味で、価

値をもっています。この価値、つまりねうち、文字どおり、その使用における役立ちですので、使用価値 (value in use または use-value) といわれます。しかし、商品は、その生産者または所持者にとっては、彼らがこれを使用するわけではありませんから、使用価値とは別のねうちをもつものでなければなりません。つまり、それは商品として交換され、それとひきかえに自分の必要とする他人の労働生産物のある一定分量を手に入れるためのものでなければなりません。それが、商品の交換における役立ち、ねうち、つづめて交換価値 (value in exchange または exchange-value) といわれるものです。

以上によって、商品は使用価値と交換価値という、二つの異なったねうち、役立ちをもっていることがわかります。この二つの価値のうち、商品生産者にとって決定的に重要な意義をもっているのは、いうまでもなく、後者の交換価値です。商品の使用価値は、その商品の自然的形態によって規定されているもので、それがどれだけの使用価値をもっているかということは——それになりたいする他人の側からの必要度、つまり社会的需要の大きさはとうていとらえることはできませんが——誰にもよくわかります。わからないのは、——交換価値をもっているというだけではどうにもならないものです——それと引きかえに他人の労働生産物をどれだけ獲得することができるかということ、つまり、交換価値の大きさがどれだけかということです。その交換価値の大きさは、とうていはつきりとらえることはできないものです。では、古典学派の経済学者たちは、交換価値の根拠をどのように説明することによって、交換価値の大きさを規定する法則を見出すことができたのでしょうか？

この場合、考え方の拠りどころとなったのは、客観的にみれば、さきに述べた価値についての通俗的な見方ではありましたが、しかし、その価値の奥になにがあるかということを追究するにあたっては、たとえ限られたものである

とはいえ、たとえばスミスに見られるように、すぐれた曇りない目をもって事柄を観察することができたといえます。その良心的な態度は、後年の「無良心と悪意」とをもって薄っぺらな弁護論をこしらえあげることだけに精を出した俗流経済学者たちとは、隔絶したものだといえますが、この点は、またあとでふれることにしたいと思います。

たとえば、スミスが取りあげたのは、「富」を生産するためには人間は汗水たらして働かなければならないということです。人間の労働が社会存立の第一の根本条件であることは、子供にでもわかるようなことです。人間が生存を保つためには「富」つまり必要物資がなければならぬ、その必要物資、つまり彼らの言うところの商品は、人間自身労働によってつくりださなければならぬ、たとえばある商品は標準的な働き方で三日分の労働によってはじめてつくりだされるとするならば、まさしく、それは、その人間にとって、三日分の骨折、つまり労働三日分だけのねうちをもっている、その商品の人間にとってのねうち、つまり価値は、三日分の労働ということになる。——これが、彼ら古典学派経済学者たちが、その曇りない目で事柄をすなおにとらえて、そこから導き出したところです。商品は、労働生産物であるかぎり、必ず何日分、もしくは何時間分かの労働という価値をもっているものでなければならぬというのが、いわばその結論です。このさい、忘れてならないことは、さきにも指摘されたところですが、この商品の価値とは、その生産者である人間にとってのねうちということです。

このようにして、同じ人間主体にとってのねうちである価値を結びつけることによって、問題となっている交換価値の大きさを規定する法則も、すらすらと導き出されてくることができます。なぜ、商品は交換価値をもっているかといえば、それは、その生産において、人間にとってどれだけの労働という価値をもっているからである。したがって、交換価値の大きさは、当然に、その商品の生産に要した労働の分量によってきまるし、また、これら二つの価

値は同じものであるから、つまり同じ商品価値として一致するものでなければならぬ。——要するに、これが、古典学派の引き出した商品価値の解釈です。

このような解釈が、科学的な理論として成り立つことができるかどうかということについては、すぐあとの「(3) 古典学派価値概念の特徴と問題点」において簡単にみてみたいと思いますが、ここで、右のような、人間の労働に結びつけて商品の価値を説明するという考え方が、どんなに常識的でありかつきわめて素材なものであるかということを読みとっていただくために、参考までに、資本主義的生産の未発展の段階ではいかに労働が交換の基準になっていたかということを物語っている叙述を引用してみることになります。これは、右の素材な価値概念を完全に揚棄しつつして真に科学的な価値概念を明確にしたマルクスにとつてのかけがえのない協力者であり盟友であったエンゲルスが、『資本論』第三部への補遺」として書いた二つの論稿のうちの一つ、『価値法則と利潤率』と題する論稿（一八九五—一八九六年、「ノイエ・ツァイト」第一号および第二号所載）のなかで、価値法則の内容を説明するさいに、まずもつてその歴史的な意味をきわめてわかりやすく解説しているところにあるものです。

「……農民も、農民に物を売っていた人々も、自分自身が労働者であったし、交換に出された品物は、めいめい自分の生産物であった。これらの生産物の生産に、彼らはなにを費やしたか？ 労働であり、ただ労働だけである。道具の補充のためにも、原料の生産のためにも、その加工のためにも、彼らは自分自身の労働力のほかにほかに支出しなかった。それならば、彼らは、このような彼らの生産物と他の労働する生産者の生産物とを、それらの生産物に費やされた労働に比例して交換するよりほかに、どうすることができようか？ その場合には、これらの生産物に費やされた労働時間が、交換されるべき大きさの量的規定のための唯一の適当な尺度であつただけではない。そこ

ではおよそこれ以外の尺度はありえなかったのである。そうでないと言うならば、農民や手工業者は、一方の一〇時間労働の生産物を他方のたった一労働時間の生産物と取り換えてやるほど愚かであったと、ひとは思うのであろうか？ 農民的現物経済の全時代にわたって、交換される商品量がだんだんそれらに具体化されている労働量によって計られるようになってくるという交換のほかには、どんな交換もありえないのである」（マルクス『エンゲルス全集、第二五巻、邦訳大月版、一一四五—一一四六ページ、傍点—山本）。

(3) 古典学派価値概念の特徴と問題点

右に述べたような、価値にかんする通俗的観念をもとにした古典学派の価値概念が、科学的な経済学的概念として成り立つものかどうかということ、つまり、結局は科学的な概念としては成り立ちがたいということは、およそ経済学についての初歩的知識をもっているほどの人々にとっては容易に感知されることである。また、そのことは歴史的にも古典学派がいに破産をとげざるをえなかったという事実によってもうかがい知られるところとされています。ですから、たいていの経済学者はもっぱらその難点を指摘することに力をいれて、それで事が足りたと考えていられるようです。しかし、私としては、その欠陥をかぞえあげるまえに、むしろ、そのすぐれた長所というものははっきりさせておくことが、より大切なことではないかと考えます。もし、それが救いようのない欠陥だらけのものであるとしたならば、どうして、それをうけついで、正しく揚棄することによって、真の科学的な経済理論をうちたてることのできたでしょうか？ 古典学派の経済理論は、通俗的な観念に支配された素朴なものであるとはいえ、後年はやりの俗流経済学という御用理論の底なしの迷蒙・浅薄さに比べれば、まさに天と地ほどのへだたりのあることを、私たちはとくと見きわめておかなければならないと思います。

そこで、私は、つぎにまず、古典学派価値概念について、その「特徴」として、そのすぐれたところを簡単に指摘しておきたいと考えたものです。つづく(四)でとりあげる「問題点」というのは、いうまでもなく、それがもっている難点なり欠陥なりを指摘したのですが、その終わりには、古典学派の経済理論の全体としての評価も、ごく簡単に指摘しておきたいと考えます。

(イ)その特徴

古典学派の価値概念について、その注目すべき長所として、私は、つぎの二点をあげることが大切と考えます。

まず、その第一点は、人間社会の存続のための絶対的基本的条件としての人間の労働を基本に据えていることです。この点は、どんなに高く評価しても、高過ぎることはありません。これに比べれば、人間にとっての効用などといったものをもってきて価格の基本に据えて、「無良心と悪意」の弁護論のおしゃべりに熱をあげているお粗末な御用理論・俗流経済学などは、とうてい比べものにはならないものです。

右の基本としての人間的労働について、たとえばスミスが、その量を問題にするにあたって必ずその質をとりあげて、その社会的標準的な質の規定を闡明していることも、そのきわだった長所として指摘されなければならぬところです。この点については、後段でとりあげられるマルクスの科学的経済理論における価値規定の内容と読みくらべて、その正しい評価を導き出すようにすることが、私たちにとって、一つの大切な課題となっているものだ、ということ、このさい指摘しておきたいと思えます。

つぎに、第二点として挙げられなければならないのは、同じ価値という言葉がつけられているとはいえず、使用価値と交換価値とのちがいが、というよりもむしろそれらのあいだの相反関係を明確にしているということです。このこと

もまた、きわめて重要な意義をもっているものです。

たとえばスミスは、いろいろの実例をあげて、使用価値がどんなに大きくてもその交換価値がきわめて小さいもの——たとえば、水など——や、その反対に、使用価値はきわめて小さいにもかかわらず、その交換価値が大きいもの——たとえば、虚栄心をみたすダイヤモンドなど——が実在することを論証し、使用価値と交換価値とはけっして比例したり相互に規定したりする関係にはけっしてないということを、明確に説いています。商品の使用価値とは、その商品——交換によって——手に入れる人間にとっての使用における役立ち、効用ということです。つまり、古典学派は、商品の交換価値とその効用とはけっして比例するものではなく、むしろ相反する関係にあるものだという事実を確認して、このことをはっきり打ち出したわけです。

ところがどうでしょう。古典学派がついに破産をとげ、これに代わって、「これとあれとどちらの定理が正しいかではなく、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合か」ということだけを問題とする「金で雇われた」、「無良心と悪意」で御用弁護論をでっちあげている「俗流経済学」（マルクス・エンゲルス全集、第二三巻、邦訳大月版、一六一—七ページ参照）が、ブルジョア経済学の支配的潮流として現われてくると、その代表者たちは、口を揃えて、交換価値は効用によってきまるといふ珍説を宣伝するようになったものです。この連中には、価値というものは逆立ちしてもとらえられませんので、彼らは、もっぱら目に見える価格にばかりしがみついているのですが、要するに、その価格＝交換価値は商品のもっている効用、つまり使用価値によってきまる、または、効用に正比例する、という主張を、その弁護論の基本に据えるというところまで、墮落したものです。

なぜ、墮落したものと云わなければならないのでしょうか？ それは、この効用と交換価値または価格とを結びつ

けることが、正常な論理をふみにじっているからですし、しかも、自分では働かないで働く人々の汗と膏の結晶に寄生している所有者階級の不勞所得を「合理化」せんがためにまったくでたらめな論を弄しているからです。

正常な論理をふみにじり、でたらめな迷論理を弄していることは、効用と交換価値または価格とをよく見くらべてみれば、誰にでもすぐわかるところです。商品の効用とは、その商品を使用する人間個人にとつての役立です。から、それは彼個人だけの問題、つまり主観的な問題です。それにひきかえ、商品の交換価値または価格は、人間個人にかかわる問題でもなく、かれ個人によつて規定されるものでも、絶対にないのです。それは、始めから終わりまで、徹頭徹尾、ひとえに社会的に、または言いかえれば、人間個人の意志や意識などにはいっさいかわりなく、客観的に規定されるものです。主観と客観とは、まったく無関係で、結びつけようもないことは、論理学など学んでいない人々にとつても、自明のことです。この、まったく無関係の二つをむりやり、もつともらしく結びつけようというのですから、正気の沙汰どころではありません、まったくでたらめもよいところ、といわなければなりません。さらに、それは、主観と客観との混同という、初歩的な論理的錯乱を示しているばかりではありません。

たとえば、食パン一斤について、「限界効用」なるものを持ち出して、さまざまな凶線を描いて、その価格は一五〇円だ、などと説明しています。しかし、この商品パンの効用、つまり役立ちとは、人間の食欲をみたすことです。

価格とは、貨幣の単位による計算をあらわしたものです。いったい、食欲のあり方またはその食欲をみたす必要の都合という生理的問題と、貨幣の計算単位とのあいだに、どんな結びつきがあるのでしょうか？ この二つがまったく関係のないものだということがちっともわからない大学教授がいるのでしょうか？ 「限界効用理論」などといった、もつともらしい名称をつけて右のでたらめの論理を弄している人々は、たとえばこう言います。「都会で

は、水は、容易に手に入り、その効用はいたって少ないからその価格はきわめて小さいが、たとえば砂漠などでは、コップ一杯の水でもその効用は絶大だから、それでその価格はひじょうに高いのだ」と。この先生は、自分の言っている言葉の意味を正確に解する能力がないことを、私たちに親切にも教えてくれています。都会で水の価格が安く、たとえば一立方米について五〇円だとした場合、その価格の高さは、効用の度合とどういう関係があるのか、どういう関係で五〇円という数字が出てきたのか説明してみるように、頼んでごらん下さい。彼は、逆立ちしても、その関係を説明することはできません。その価格は、その水を使う人たちの効用の度合にはいっさいおかまいなく、その生産費できめられているのです。

古典学派のすぐれた経済学者たちが、使用価値と交換価値とをはっきり区別し、両者の間に比例関係などいっさい存在しないことを明確にうちだしているのは、彼らの曇りない素朴な目ととられない良心的探究のほどを示すものとして、私たちには、とりわけ教訓的なものといえます。この教訓にもかかわらず、効用と価格とをむりやり結びつけるというでたらのめの錯乱的手法を弄してまで所有者階級の御用「理論」を宣伝してまわっている俗流経済学者たちの厚顔無恥ぶりは、たとえようもないものだ、といわなければならないと考えられます。

(四) その問題点

つぎに、古典学派の価値概念について、その難点ともいうべきものを簡単に考えてみなければなりません。

第一にあげられる基本的な問題点は、価値という言葉そのものの意味内容にかかわるものです。

さきに見たように、古典学派にとつては、価値とは、人間主体にとつてののうち、役立ち、効用です。いま使用価値を一応度外視するとすれば——というのは、この「使用における価値」は、その商品の自然的形態によって規定さ

れたものであるかぎりでは、このさい、問題はないものと考えられるからです——、商品の価値には、その生産において生産者にとって値あたしたねうち、つまり労働＝労働と、その商品が交換に出されたときそれとひきかえに他人の生産物＝商品を獲得する役立ちまたはねうちとの、二つがあります。古典学派は、そのどちらも人間にとってのねうち、もしくは値あたしたものとすることで、この二つを結びつけて、交換価値の大きさは生産に要した労働の量によってきまるという原則＝「原理」を導き出したものであることは、さきに見たとおりです。しかし、生産における労働は、生産者自身がその身体を働かし労働すること、人間主体にとってのいわば犠牲ともいべきもの、つまり負担を示しています。これに反して、交換価値は、なるほど人間にとってのその商品のねうちであるとはいっても、そのねうちの主体は商品そのものです。つづめていえば、さきの価値は人間を主体とする価値であるのにひきかえ、あとの価値は物を主体とする価値ということになります。これは、論理的に見て、やはり不合理なものと言わなければなりません。

生産における価値と交換における価値とは、右のように質的にちがったものであるばかりでなく、量的にもちがったものになるという事実があります。生産における価値、つまり投下した労働の大きさは不変であっても、その商品の交換における価値、つまりそれと引きかえに獲得する商品の量は変化し、したがってまた獲得する価値＝労働の量がいろいろにちがってくることは、商品生産社会では誰でもよく知っているとこです。

右のような問題点は、ふつう投下労働と支配労働との食い違いというように表現されて、古典学派の価値概念の難点を示したものとされています。投下労働は人間を主体として人間にとって要費したものをあらわしているのにたいして、支配労働は、商品そのものが主体となって、その商品が人間にとってもつ役立ちを指したものだということ

に、見逃すことのできない問題があるわけです。これは、見方によっては、交換価値をあくまで人間を主体とするねうちととらえるところに、その難点を生み出した一つの原因があるとも言えます。⁽¹⁾

(1) 右のような難点を解決して、商品の価値をば、人間に対立した物・商品そのものが独自にもつ価値であって、人間の労働はなるほど「価値の実体」を成すものではあるが、労働そのものはなんらの価値も価格もちえないという明確な科学的価値概念をうちたてたのが、ほかならぬマルクスそのひとであることは、よく知られたところですし、また後段においてつまびらかにされるところでもあります。ところが、マルクスの科学的経済理論を専攻する経済学者でありながら、マルクス価値概念の根本的特徴を把握することができなくて、古典学派の考え方をそのまま採って、「それがマルクスの価値論である」と説明している者が、今日にいたるまで依然として跡をたたないのは、いったい、どうしたことでしょうか？ これらの学者は、古典学派と同じく、「商品が価値をもつのは、人間がその生産のために労苦したからである。生産に費やされた労働が商品の価値なのである。これが、マルクスの言うところの労働価値説の内容である」といった説明をします。いまから約一〇年前、私がヨーロッパに留学したさい、ロンドンで聴いたイギリスの著名な「マルクス経済学者」の方も、その労働者向けの講義のなかで右のような「労働価値説」を説いていられましたし、また、わが国の著名な「マルクス経済学者」である河上肇氏も、同様の説をば、「価値人類犠牲説」という言葉で表現して説いていられます。これらの真摯な「マルクス経済学者」の方たちは、たとえどんなにマルクスのうちたてた科学的な経済理論を忠実・正確に学びとっていると御自身考えられているとしても、残念ながら、客観的にみれば、これらの方たちは、マルクスによって揚棄されつくしたその古典学派の価値概念にとらわれているものと言わざるをえないのです。

古典学派の価値概念のうちにふくまれてくる第二の難点としては、つぎのことがあげられます。それは、つまり、商品価値を人間にとつてのねうち、役立ちととらえ、この「文明社会」では、「分業」のおかげで、労働生産物はすべて価値をもつもの、人間に奉仕するものというような考えを固執しているかぎり、貨幣とはどういうものかというその本質がまったくわからなくなってしまう、貨幣のもつ重大な特質については完全に無理解のまま終わらざるをえ

なくなる、という点です。

さきに見たような、「文明社会」での商品と商品価値についての考え方からしますと、どうしても、貨幣は、商品の交換を媒介する便利な道具であるという主張に導かれてしまいます。そこで、たとえば、「葡萄酒と羊とを交換する場合に、もし貨幣がなければ、「羊の体を半分切らなければならぬ」といったような、愚にもつかない理由づけが、もっともらしく並べられることになります。

人間が主人公であつて、その主人公に奉仕する便利な道具であるといふのであれば、それは、生活必需品、たとえば鍋とか釜とかいふような物とまったく同じで、人間によつてはじめて役立てられ、生かされることになる物です。しかし、貨幣は、どうでしょうか？ 貨幣は、人間に奉仕する便利な道具で、人間によつてはじめて生かされ、役立たせられる物、もし人間がそれを使って役立たせることをしなければ、鍋、釜と同じように、死んだ物としてなんの役にも立つことなく、錆びつき、腐りはじめて、最後には無用の廢物としてごみ溜めのなかに放りこまれてしまふ物となるでしょうか？ とんでもない、そのようなことは、天地がひっくり返つても起りません。いや、それどころか、貨幣は、道具などに終わるものではなく、それ自身、目に見えない魔力をもつて人間を完全に支配してしまいます。貨幣は、たんに商品ばかりでなく、名譽でも地位でも、いや、人間そのものをさえも、いくらでも自由にする力をもつています。貨幣が人間にとつての道具なのでなく、まさしくその反対に、人間こそ貨幣がこれを十二分に使いこなす道具となつてゐるのです。このような貨幣の魔力については、誰ひとり知らない者はいません。にもかかわらず、古典学派的經濟学者は、この紛れもない貨幣の全能という嚴然たる事實を、ついに説明することができなかつたのです。これは、この学派的価値概念の最大の欠陥の一つをなしてゐるものです。

最後に挙げておかなければならない難点は、右に述べた第二の難点と結びついたものですが、この価値概念をたたく展開するかぎり、資本の取得する利潤も、土地所有者がそのふところに入れる地代も、それを「合理化」する根拠が完全になくなってしまふ、ということです。

右の難点は、実際の生産にあてはめて考えれば容易に理解されると思いますが、念のため、例をあげて説明してみましよう。いま一人の独立自営農民（「自作農」）が、自分の所有する種子、肥料、農器具をつかい、自分ひとりの労働力を支出して、自分の所有する土地によって、一定分量の小麦を収穫したとしますと、その小麦の価値の内訳はどうなっているでしょうか？ そのなかには、もちろん、種子、肥料、農器具の価値がそのまま移ってきたものがあります。それらを差し引いた残りの価値部分は、もちろん、この農民が汗水たらして働いてつくりだしたもので、つまり、彼の労働がつくりだした価値にほかならないのであって、右の生産手段から移ってきた価値と彼の労働による価値とを除いては、そこには**鑑**一文の価値もありえません。では、ここで借地農業資本家と土地所有者とに登場ねがって、その借地農業資本家が資本を出して、土地を借り、農業労働者を雇い入れて、同じ規模の生産手段を購入してこれを投下して、農業労働者に同じだけの労働をさせて、同じだけの小麦を収穫したとするならば、その生産物「小麦の価値の内訳は、いったい、どうなるでしょうか？ 農業労働者が受けとる労働賃銀は、古典学派の経済理論にしたがえば、文字どおり労働にたいする対価であって、彼が労働しただけのものが全部支払われることになっているとされていますから、結局、生産物「小麦の価値は、農業労働者の労働による価値と生産手段からそっくりそのまま移ってきた価値とを合わせたものだけで、それを越える価値は一文もなく、しかも、農業労働者がその労働によってつくりだした価値は、その言葉どおり、労働賃銀として農業労働者に支払われなければなりませんから、その借地農

業資本家の手にはいるのは、種子、肥料、農器具などの生産手段を填補するに足りるだけの価値だけだ、ということに必然的になってしまいます。これでは、資本家の唯一の目標である相当額の利潤も、また、土地所有者が眠っている間も自分のふところどころがりでこんでくるものと期待していた相当額の地代も、まったく夢と消えて、これら御兩人は、ともども霞を食って生きながらえるという世にも珍らしい芸当を演じることがよぎなくされるといふことになってしまいます。

右のような成り行きは、古典学派の価値概念を正しく適用して発展させるかぎり、絶対に不可避なものです。しかし、資本家や土地所有者が霞を食うということになれば、「見えざる神の手」に導かれて永遠に繁栄の道をたどることを保証された「文明社会」、つまり資本主義社会はたちまち雲散霧消ということにならなければなりません。三大階級が、「仲良く」、調和を保って共存して行くためには、どうしても資本家には利潤を、土地所有者には地代を「保証」してやる必要があります。そこで、さきの価値概念は、この二大階級の生存を「保証」してやる必要上、重大な修正をこうむることになるというわけです。たとえば、「素朴純真」なスミスはこう言います。——資本家や土地所有者がいけない段階では、労働によってあらたにつくりだされた価値生産物はすべて労働に、つまり農民自身の働きが生んだものとして全部働き手・農民のものになるが、しかし、資本家が出てくると、価値生産物のうちから利潤として一定部分を獲得しないかぎり、農業労働者を雇って生産をするということをしなさい。また、土地所有者が出てくると、価値生産物のうちから地代として一定部分を支払ってもらわなにかぎり、土地を貸して使用させることはしなくなる、と。こういう説明が、利潤や地代の根柢を明らかにするなどというものではまったくないこと、ただ、生産物のうちから利潤や地代としてまきあげるからそこに生まれる、ということを行っているだけの、まさに鉄面皮な「合

「理化」でしかないということは、誰にもすぐわかることです。しかし、人間社会のうちのもっとも発展した「文明社会」を絶対視し、その三大階級の存続を「保証」して、彼らの永遠の「樂園」を「理論的」に「合理化」するためには、折角の価値概念もむざんにひん曲げられないではないということになったものです。それと同時に、「労働にたいする対価」としての「労働賃銀」の内容も、その根底から歪められ、変造されることになってしまったものです。生産物価値のうち、生産手段から移ってきた価値部分を除けば、ことごとく労働によってつくりだされたものですから、新たに生産された価値は「労働にたいする対価」とまったく同じにならなければならぬのですが、それでは、資本家と土地所有者は霞を食って生きるという芸当を演じさせられる運命におちいります。なにはさておいても、利潤と地代とを「保証」してやらなければならず、そのためには、あらたにつくりだされた生産物価値のうちから、まずこの二つの不労所得を最優先的にとりのぞいておく必要があります。これら二つの不労所得を控除した残りの、ほんの少しの価値部分を指して、「それは労働によって生みだされたものだ、それこそが労働の対価だ」と、声を大にして主張する、という次第です。ここにいたっては、科学も法則もあつたものではありません。価値概念は、ここで完全に破産し、壊滅におちいるということになります。ことこここにいたっては、私たちは、偏見なしに経済法則の把握にとめてきた古典学派経済学者たちの曇りない目も、資本家と土地所有者の階級的利害優先という考え方によって、残念ながらすっかり濁った斜視に変わってしまったことを思い知らされたいではありません。まことに、マルクスが、名著『資本論』の「第二版後記」のなかで的確に指摘している「ブルジョア経済学の吊鐘」が鳴りはじめ、「いまや問題は、これとあれとどちらの定理が正しいかではなく、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合か、反警察的であるかそうでないか」（前出、第三卷、一六ページ）ということになる事態への必然的転落は、右の

ような価値概念のみじめな破産が早くもその予兆を示したものである、と私たちは確信することができるように考えられます。

三 マルクスによる科学的価値概念の確立

マルクスによってうちたてられた価値概念がどのようなものであるか、また、なぜ、マルクスのうちたてた価値概念を科学的なものというのか、ということについて、これから、目次にかかげられたような順序で、できるだけ要領よく、簡潔に説明して行きたいと思えます。

(1) 科学的経済学の基本的視点

まず、経済学とはどういう学問であるかといえば、それは、簡単には「生産および交換にかんする法則」を解明する科学である、といわれています。もうすこし詳しく言いますと、ひとつの社会を支える総必要生産物がどのように生産され、それがどのように分配され、交換されて、その国民全体が、いいかえれば、社会全体が存続し、発展して行くかという、その生産、分配、交換の仕方を規制する法則を解明するものだといえます。これまで人間社会は、まず原始共産社会にはじまって、そのあと奴隸制社会、封建制社会、資本主義社会と、三つの異なった階級社会をつぎつぎに経て、いま世界全体としては、資本主義社会から階級のない社会主義社会への移行が始まった局面にあるといえます。すべてこれら五つの人間社会は、その社会の存続を支える必要生産物を生産するために不可欠の生産手段を誰が、どのように所有しているかということ、つまり生産関係によって、さきに述べた生産の仕方、分配・交換の仕方が規制されていますので、これらの法則を「生産および交換にかんする法則」というように言いあらわしているの

です。これらの経済法則を、たとえば、さきに見た古典学派のように、「文明社会」で人間がつくりだしたものだということのように、「原理」としてとらえたのでは、それによって、どの歴史的社会の実際のあり方とも関係のないもの、つまり、頭の中での産物にすぎないものとなっております。これでは、とうてい科学とはいえません。しかし、ただそれぞれの歴史的社会についてそこで貫徹している経済法則を明らかにするだけでは、科学として、とくに歴史科学としては不十分なものです。なぜ、ひとつの歴史的社会が必ずきまった次ぎの歴史的社会に、たとえば封建制社会が資本主権社会に、そして資本主義社会がつぎのより高い社会主義社会にとりかわるというように、不可避的に移行し発展してゆくのか、という、その実際の歴史的發展法則というようなものをよく説明することができたとき、そのときはじめて、そのような経済学をこそ、科学的な経済学と言うことができるのです。この点からみると、こうした歴史的發展法則についてなにひとつ明らかにすることもなく、ひたすら、この資本主義社会の階級関係の永遠の存続を前提して、ただそれらの諸階級の間の分配の量的変動をあれこれいじりまわして事足りりとしている「近代理論経済学」というしやれた名の「学問」が科学の名に値しない御用弁論にすぎないことは、さきの素朴な古典学派の立場と比べてすら、あきらかであると思われます。

では、マルクス経済学については、右の歴史的發展法則はただしくとりあげられているでしょうか？ それは、ただ取りあげられているというだけではなく、明確に説明されているのです。それが、有名な「唯物史観の定式」といわれるものにまとめられています。これは、マルクスの著作『経済学批判』への「序言」のなかで、はっきりと説明されているのであって、マルクス経済学について少しでも学んだことのある人はよく知っているところです。その歴史的發展法則とは、簡単に要約していえば、つぎようになります。ある一つの歴史的社会は、そこでの生産力の発

展水準に見合った生産関係によって成り立っているものですが、その生産関係のもとで、その生産関係によって規定された経済法則が貫徹して生産・分配が行われていますと、そのうちに必ず生産力が発展をとげて、その生産関係と矛盾するようになり、その生産関係は生産力のよりいっそうの発展を妨げる桎梏になってきます。そこで、その生産関係、いかえれば階級関係を根本的に変革して、より高い生産力に見合った、より進んだ生産関係の社会につくりかえなければならなくなります。それが、社会革命といわれる時期に当るわけです。

マルクスは、古典学派の経済理論について、これを弁証法的唯物論の見地から再吟味し、原始共産社会から資本主義社会にいたるまでの諸社会の歴史的發展過程を研究し、また、イギリスとフランスのすぐれた空想的社会主義者たちの言説をよく検討することによって、ついに、その資本主義社会を貫徹している経済法則の体系的説明をなしとげることができたばかりでなく、その諸法則の貫徹そのものによって、生産力と資本主義的生産関係との矛盾が發展・成熟すると同時に、つぎのより高い社会主義社会を建設すべき物質的な諸条件とあわせてその変革を遂行すべき唯一の主体的勢力とが、どのように形成され、完全に整備されるように不可避的になるかという、歴史的發展法則の貫徹についてまで、体系的に、あますところなく説明しつくすことができました。

頭の中の社会ではなく、現実にある社会、歴史的に生まれ、發展し、またつぎのより高い社会へ移行すべき社会について、その生成、發展、消滅、交替という、実際の運動法則を体系的に説明することを成しとげたからこそ、マルクスのうちたてた経済学は、りっぱな一個の科学、歴史科学であると、正当にもいわれるわけです。

マルクスが分析したのは、いうまでもなく資本主義社会の経済法則であって、その体系的論究が、世紀的名著『資本論』全三巻に示されていることは、誰ひとり知らないひとはいません。また、その経済法則の体系的論究におい

て、最初にとりあげられて説明されているのが、ほかでもない、商品^の法則^{である}ということもよく知られているところだ。このように、商品の分析は、体系的論究の最初の出発点であって、ヘーゲルがその有名な『精神現象学』のなかで力説しています「学はなにをもつて端緒とすべきか」という問題提起とその説明に照らして申しますと、それは、まさに、そのような「科学の端緒」に当るものと言うことができます。「商品の法則」は、資本主義的生産関係のもとで、この生産関係によつて規定されて必然的に貫徹する経済諸法則のうち、最初の、もつとも簡単な、もつとも基本的な——それゆえにまたもつとも抽象的な、といわれる——法則です。そして、この商品の法則の究明は、内容からみますと、「商品価値の究明」ということが主となっているものといえます。

そこで、マルクスのうちたてた価値概念の内容にはいるまえに、まず商品の法則のあらましについて、簡単に説明しておきたいとおもいます。この商品の法則は、またそれとして、すこしく予備的説明を必要としますので、はじめにまず、つぎの(2)と(3)で、そのための一般的・予備的な説明をし、そのあとの(4)で、商品の法則の要点を簡潔に述べさせていたでいて、そのうえで、これらの予備的説明をふまえて、つづく(5)で、マルクス価値概念の基本をとらえるという順序で、考察をすすめることにしたいと思います。少々まわりくどくなりましたが、要するに、(2)、(3)、(4)は、いずれも価値概念の内容をその十分な広がり^と深さ^{において}とらえるために必要な前提要件を示したものだ、という事です。

(2) 社会存続の根本条件としての人間的労働

科学的な価値概念を正確にとらえるためには、なによりもまず、人間的労働が社会存続の根本条件であるという基本的法則をしっかりと基礎にすえておかなければなりません。社会のありとあらゆる生活必要物資はもとより、必要

な生産手段も、そしていっさいの文化的施設と文化的創造物にいたるまで、これらはすべて、人間の労働にもとづいて人間の労働の生産物として、はじめて生み出され、存在し、そして機能することができるようになっているものです。このような、人間社会存続の第一の根本的条件である人間の労働がその理論の基礎に据えられていないような「経済理論」は、そのことひとつで、すでに歪められたもの、他人の労働の上に寄生している支配階級の御用を勤める屁理窟の寄せ集めにすぎないということがよくわかります。古典学派の経済学者たちは、この根本条件を素朴に受けとって、これをその価値概念の基礎に据えたのですが、右のような寄生的諸階級の存在理由を「合理化」するという弁護論的立場を固執したために、むざんな破産に終わることになったもので、このことはさきによく見たところでは、マルクスは、どうでしょうか？

マルクスは、その友人、ルートヴィヒ・クーゲルマンにあてた有名な一八六八年七月一日付の手紙のなかで、マルクスの価値論にけちをつけようとする一論者のいわれない論評にたいする答えとして、つぎのような説明を記しています。

「かわいそうにこの男には、もし私の本に『価値』にかんする章が一章もないとしても、私がやってみせた現実の諸関係の分析が、現実の価値関係の証明と実証を含むことになるという点がわからないのです。価値概念を証明する必要がある、などというおしゃべりができるのは、問題にされている事柄についても、また科学の方法についても、これ以上はないほど完全に無知だからにほかなりません。どんな国民でも、一年はおろか、二、三週間でも労働を停止しようものなら、くたばってしまうことは、どんな子供でも知っています。どんな子供でも知っているとさえ、つぎのことにしてもそうです、すなわち、それぞれの欲望の量に應じる生産物の量には、社会的総労働のそれぞれ一

定の量が必要だ、ということですが。社会的労働をこのように一定の割合に配分することの必要性は、社会的生産の確定された形態によってなくなるものではなく、ただその現われ方を変えるだけのことというのも、自明のところですが。自然諸法則というものは、総じて、なくすことができないものです。歴史的にさまざまな状態のなかで変わりますのは、それらの法則が貫徹されていく形態だけです。……」（マルクス『エンゲルス全集、第三二巻、邦訳大月版、四五四ページ、傍点―マルクス〕。

みられるように、ここには、はっきりと、社会の存続を支える根本条件としての人間的労働と、その労働の配分とが、すべての社会に共通する一般的な法則であることが、確言されています。そればかりでなく、このような労働と労働配分という、不可抗力的な、人間の意志のいかんにかかわらず貫徹する社会的法則――これを、マルクスは自然法則と呼んでいるのです――が、それぞれの異なった歴史的社会で、どのような形態をとって貫徹するかを追究するのが、まさに科学としての経済学の任務なのだということも、ここで説かれています。科学的な経済理論体系のなかで、その端緒となるものが商品の分析であることはさきに指摘されましたが、その商品の分析が、その内容からみればまさに「価値諸関係の証明と実証」であり、「価値概念そのものの説明」にはかならないこと、そして、この商品の分析の最初に置かれている基礎が、まさしく、右の労働と労働配分との一般的自然法則の確認にほかならないということは、右の叙述の中で明確にうちだされているところといえます。右の手紙の内容は、さらにもっと重要な意味をふくむものですが、これについては、また後段でとりあげることにはしたいと思います。

(3) 労働の二面性の把握

人間的労働とは、人間だけが担っている労働能力、つまり調和のとれた精神的能力と肉体的能力とを統一的に、そ

して合目的に支出することですが、その内容は、けっして簡単なものではありません。古典学派の経済学者たちは、この労働をたんに人間にとつての労苦という意味に解して、人間にとつてのねうち、つまり価値というようにして、交換価値に結びつけたものだということとは、さきに説明されたところでは、これらの経済学者たちにとつては、資本主義社会の住民がその必要に迫られての商品交換において唯一最大の関心を払わざるをえないこと、つまり、自分の提供する商品が、それとひきかえにどれだけの量の他人の生産物を獲得してくれるかということに、つづめていえば、その商品の交換価値の大きさにあつたように、その関心は、主として交換価値のほうに向けられていたために、労働は、石のように労苦としての人間の労働という一面しかとりあげることができなかった、ということができません。しかし、商品を生産するということは、それをたんに交換価値をもつものとして生産することだけではなく、同時に、それを使用価値をもつものとしてつくりだす、ということですから、商品を生産する労働は、同時に、一方において交換価値をつくりだす労働であるとともに、他方において使用価値をつくりだす労働でもあるし、またそのような二面性をもった労働でなければならぬ、ということがわかります。そのような労働の二面性をはっきりとらせることによって、はじめて使用価値と交換価値とを、つまり商品を生産する労働の内容と正しく結びつけて、把握することができるのです。

右のように説明してみますと、労働の二面性を把握することは、しごく簡単で容易なことのように思われます。しかし、それは、けっしてそのように簡単・容易なものではないのであって、そのために、せつかく人間的労働を基本に据えながら古典学派は、科学的な価値概念に近づくことができなかつたものです。

右の労働の二面性をはじめて明確にとらえて、これを商品分析の基本に据えたのは、周知のように、マルクスで

す。いや、そればかりではありません。この労働の二面性の的確な把握が、科学的な経済理論体系を確実に理解するために欠くことのできない基本的視点の一つとなっていることが、マルクスの理論体系の展開のなかでみごとに実証されているということを、私たちは知っていなければならないのです。

主著『資本論』の第一巻第一章「商品」において、そのうちの第二節をことさら「商品に表示される労働の二重性」と題して、マルクスは、その重要な意味内容を解明していますが、この第二節の冒頭には、つぎのような有名な叙述が置かれています。

「最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた。次には、労働も、それが価値に表わされているかぎりでは、もはや、使用価値の生みの母としてのそれに属するような特徴をもっていないことが示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめ批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な軸点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない」（前出、第三巻、邦訳大月版、五六ページ、傍点・山本）。

「決定的な軸点」というのは、経済学という科学的な理論体系についての精確な理解というものは、この労働の二面性の正確な把握を軸として、それを中心としてはじめて回転することになっているのだ、ということですから、私たちは、たんに商品の分析、価値概念の把握にとってそれが必要不可欠であるばかりでなく、さらにすんで資本についての諸法則の展開にさいしてもそれが必要不可欠なものだということを、さきに行って具体的に確認しなければならぬのだということを教えられているわけです。

使用価値をつくりだす労働は、特定の目的、作業様式、対象、手段、結果のきままっている、特定の具体的な形での

労働力の支出であって、これは具体的労働または具体的有用的労働といわれますが、これにたいして、交換価値——厳密には、価値——をつくりだす労働は、そのような特定の形態をぬぎにした、ただ人間労働力を支出するというだけの労働で、このように特定の形を問題にしない、たんなる人間労働力の支出ということですから、これは抽象的労働、または抽象的労働といわれるのです。このあとの抽象的労働というのは、言葉そのものとして一見難しいものですが、誰でもなんらかの労働をするときには、それをちゃんと意識して労働しているのです。たとえば、ある農民が畑仕事をするとき、一日の総労働時間を一〇時間というようにおさえて、そのうちの四時間を畑の耕耘に、一時間を施肥に、二時間をビニール掛けに、三時間を灌水と草取りにという具合に配分してやりますが、これは、抽象的な労働の分量を、それぞれ具体的な形態に割り当てて支出しているもので、やはり労働の二面性を正確にとらえて応用しているものだといえます。

右のマルクスの叙述で注意しなければならないのは、「商品に表示される労働の二重性」とか、「価値に表わされる労働」とかいうマルクスの言葉遣いです。労働の二重性ということは、さきの農民の例でもよくわかるように、人間がおよそ労働するかぎり、どんな社会でも、どんな状態のもとでも、必ずこの二面を意識して、労働時間を適宜具体的労働に割りふって、労働を実行しているものです。それは、超歴史的なものです。ところが、右にあげたマルクスの文句を不注意に読みますと、「労働の二重性は必ず商品に表示されるものである、商品の価値に表わされるものが抽象的労働である、だから、商品のないところに抽象的労働はありえない」といった考え方に誘われがちです。ソ連の著名な『資本論』学者、デ・ローゼンベルグは、その労作『資本論注解』の中で、「抽象的労働は、商品生産社会にだけしか存在しない」という主張をかかげていますが、これは簡単自明の事実をとらえないでただマルクスの文

字をひねることで引きだした、まことにみじめな「結論」ではないものです。ところが、この国では、ローゼンベルグの謬論をそっくりそのまま真似て同じ主張を書き立てている「マルクス経済学者」も出てくるという有様です。私たちは、マルクスの叙述を正しく受けとめて、いつ、どこでも人間の労働はつねに二面的であるが、商品生産社会ではそこで貫徹する特別の経済法則によって、具体的労働は商品の使用価値に、抽象的労働は商品の価値に必ずならなければならないのである、というように理解することが絶対に肝要なのです。

ではなぜ、どのようにして、労働の二面性は商品の二面性として表示されなければならないのか？——このことを説明するところに、科学としての経済学の本領があるということができると私は考えます。この問題は、つぎの(4)以下でとりあげられるところです。

(未完)